（２）発掘調査の実施

かけしたじょうあと
欠下城跡

所在地　　新城市矢部地内
　　（北緯 34 度 55 分 27 秒
　　東経 137 度 30 分 17 秒）
調査理由　第二東海自動車道横浜名古屋線
調査期間　平成 23 年５月～平成 23 年８月
調査面積　1,560 ㎡
担当者　　成瀬友弘・鈴木恵介

調査地点（1/2.5 万「三河大野」）

調査の経過　発掘調査は、第二東海自動車道横浜名古屋線の建設に伴う事前調査として、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所より依頼を受けて行った。

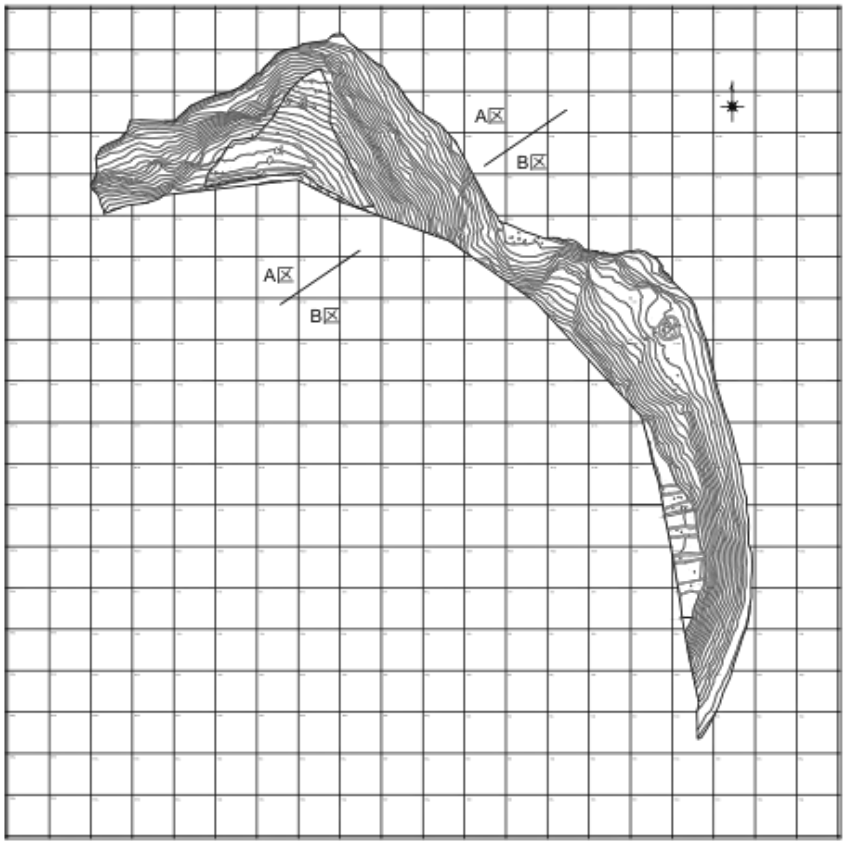
立地と環境　本遺跡は新城市の中央部に位置し、地形的には豊川右岸の山塊から南東にのびる丘陵の中腹に立地している。調査区は、前年度公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが行った調査区の東側にあたり、欠下城跡の北側から東側にかけての一部平坦面を含む斜面地にあたり、遺構検出面の標高は 120m～140mである。

調査の概要　調査区は欠下城跡北側斜面部をＡ区、東側斜面をＢ区として調査した。基本層位は地表より深さ 0.1m～0.3mの表土(腐植土)層などの下すぐに基盤層となる。このため遺構検出は表土層の除去を人力で行った段階で行った。

その結果、Ａ区において、斜面部上部に基盤層を削り込んだ平坦面である 001SX を確認し、古代から近世までの遺物を確認した。Ｂ区では、平坦面２カ所確認され上段の平坦面では近世の耕作に伴う溝 002SD～006SD が確認され、下段の平場では近世の土坑と思われる 007SK が確認された。B 区の遺物は中世から近世の遺物が確認されている。

まとめ　今回の調査では、前年度の調査のように勅養寺観音堂との関連を思わせるような遺物はなく、時期的にも、この時期に該当すると考えられるものは斜面下部を流れる沢が運んだと思われる堆積物の中に山茶碗などがあるのみである。また城と考えられる遺構や遺物もほとんどない。ただし、Ｂ区の上段の平坦面については検出時や溝の掘削時に中世後期と考えられる土師器の皿や鍋がわずかながら出土していることから中世後期にこの部分が作り出された後、近世に畑となったと考えられる。これらの結果は今後欠下城跡を考える上で貴重な資料となると考えられる。（成瀬友弘）

調査区位置図（１：１０００）



調査区平面図（１：６００）

調査区全景（北東から）

Ａ区全景

Ｂ区全景

Ａ区 001SX（完掘状況）

Ｂ区下段平坦面（完掘状況）

Ｂ区 007SK（完掘状況）

みなみかわ
南川遺跡

所在地　豊田市花沢町地内
（北緯 35 度 1 分 40 秒
東経 137 度 13 分 33 秒）
調査理由　豊田・岡崎地区内研究開発施設用地造成事業
調査期間　平成 23 年 9 月～平成 24 年 3 月
調査面積　2,300 ㎡
担当者　鵜飼雅弘・鈴木恵介

調査地点（1/2.5 万「東大沼」）

調査の経過　調査は、豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う事前調査として、愛知県企業庁から愛知県埋蔵文化財調査センターが委託を受けて実施した。

立地と環境　南川遺跡は、郡界川によって東西方向に開折された谷の北側、郡界川と土々目木川の合流点の北東側に近在する。調査区の東方と北西側に丘陵を背負い、その西麓の土々目木川沿いの自然堤防周辺が遺跡範囲となっている。調査の結果から、中世、縄文早期・中期～後期の遺物を含む包含層が確認されたが、これら包含層と自然流路が国道 301 号線の下に連続しており、平成 22 年度に実施された試掘調査において国道の南側で確認された遺物包含層と同一のものと思われる。同じ包含層の一部は、平成 24 年度の沈砂池造成に伴う立会調査によっても確認されている。ただし国道 301 号線の南側は大規模に圃場整備を受けており、少なくとも国道 301 号線に近い部分では包含層の大部分は滅失している。これらの包含層の分布から、調査区東側の丘陵裾部に本来の遺跡の中心部が位置し、そこから廃棄・流出した遺物が包含層に含まれていると考えられる。

調査では基盤層（地山）にあたる層位が土石流による巨礫と粗砂の厚い堆積であることを確認し、かつては郡界川によって強く影響を受ける立地であったことも示す。（愛知県埋蔵文化財センター鬼頭氏によるご教示。）

また、元来の地形は土々目木川に沿いながら東より西に向かって緩やかに下る地形と考えられるが、現況の水田耕作面はＢ区側がＡ区よりも約 0.4m 高く、Ａ区では水田の耕作に関わる作業により包含層や遺構がＢ区よりも多く削平されている。そのため後述の遺物包含層である③・④層の残存状況はＢ区がＡ区に勝る。そのため水田耕作土を除去した１面では、Ａ区とＢ区では検出面の高さが異なり、遺構の検出数もＡ区とＢ区で異なる。

調査の概要　調査区は、国道 301 号線に面し、丘陵西側の裾に接する。調査対象区は三角形を成し、現況の水田畦部分を境に西側をＡ区、東側をＢ区として設定した。調査はＡ区・Ｂ区の順に実施した。主な遺構は、Ａ・Ｂ区ともに、土々目木川の自然堤防を境にして、北側の土々目木川沿いに分布する大窯期の遺物を主に包含する上位の層（③層）、調査区南半部に分布する縄文早期・中期～後期の土器・石器を包含する下位の層（④層）、および最下層には自然流路跡（115SD）がある。115SD はＡ区南東部・Ｂ区南西部を囲む環状の形状を成すが、Ａ区・Ｂ区いずれも調査区南壁付近で底面が最も低くなる。このことから単純に北東から入り、北西へ流下する溝ではなかったようである（図２）。

縄文時代の遺構　Ａ区では、現況の水田耕作土除去後の検出面において、柱列（100・101・102SA）を検出しているが、③層・④層上面の検出であるため、時期は相対的に新しく近現代の可能性もある。遺構の性格としては、稲木（イナギ・ハサカケ）の可能性を考えている（図１）。

Ｂ区では数個の柱穴は検出できたものの、列や建物を形成するにはいたらなかった。この他には風倒木痕、近世～近代耕作痕が中心であり、本遺跡の遺物出土の中心を成す縄文時代と確実視できる遺構は見られない（図１）。風倒木痕の多くは④層を埋土とし③層以上は含まない。このことから④層形成後③層形成前の段階で木が繁茂する植生があったと考えられる。

縄文時代の遺物　遺物は、縄文時代早期の押型文土器、含繊維土器から後期の土器、石鏃、削器の製品や石器の破片等、地点取り上げの遺物だけで 600 点以上が出土した。石材には、黒曜石、サヌカイト、下呂石、溶結凝灰岩、チャート、安山岩（根羽石、いわゆる遺跡石）がみられる。安山岩の石核は４点出土した。この安山岩には矢作川流域産のものと豊川流域産が含まれる可能性があるとの指摘も受けた。（みよし市教育委員会平井氏によるご教示。）

中世の遺物　土々目木川沿いの包含層（③層）からは大窯期の瀬戸・美濃陶器破片も多数出土し、輸入磁器破片（龍泉窯産青磁）も１点確認している。

まとめ　南川遺跡の調査は、結果として遺構は少数だったものの、遺物の出土点数は予想を上回り、遺存状態も良好なものが多かった。Ａ区・Ｂ区を通じて居住や生産活動を示す遺構は見られないものの、縄文時代の遺物では石器や剥片、中近世では土器・陶磁器が出土したことは、調査区の近隣において当時の人々が活動していたことを強く示唆するものと思われる。また、調査によって出土した縄文時代の石器に、黒曜石やサヌカイト等、他地域で産出される石材が多く見られることは、他地域との積極的な交流を示すものと考えることができよう。　（鈴木恵介）

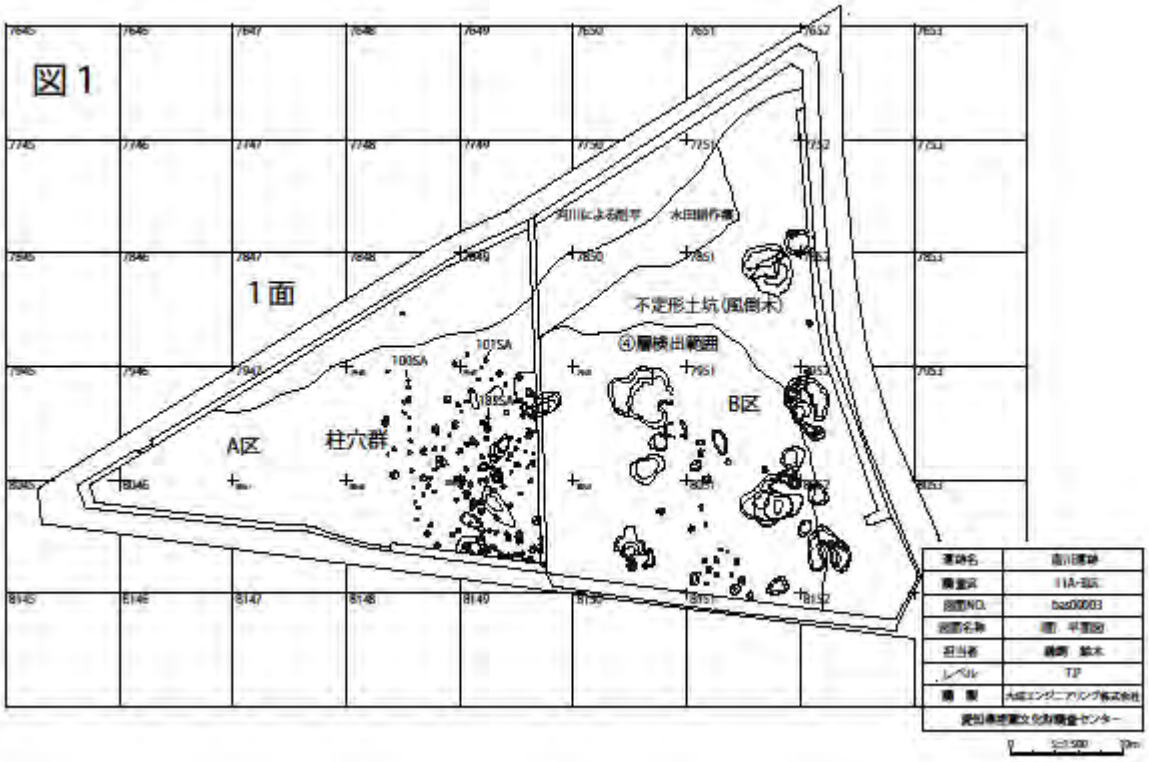


図1
1面
河川による削平
水田耕作痕
不定形土坑(風倒木)
④層検出範囲
100SA
101SA
A区
柱穴群
B区
遺跡名
調査区
11A-B区
図面NO.
bas00003
図面名称
1面 平面図
担当者
藤原 鈴木
レベル
TP
縮 尺
S=1:500

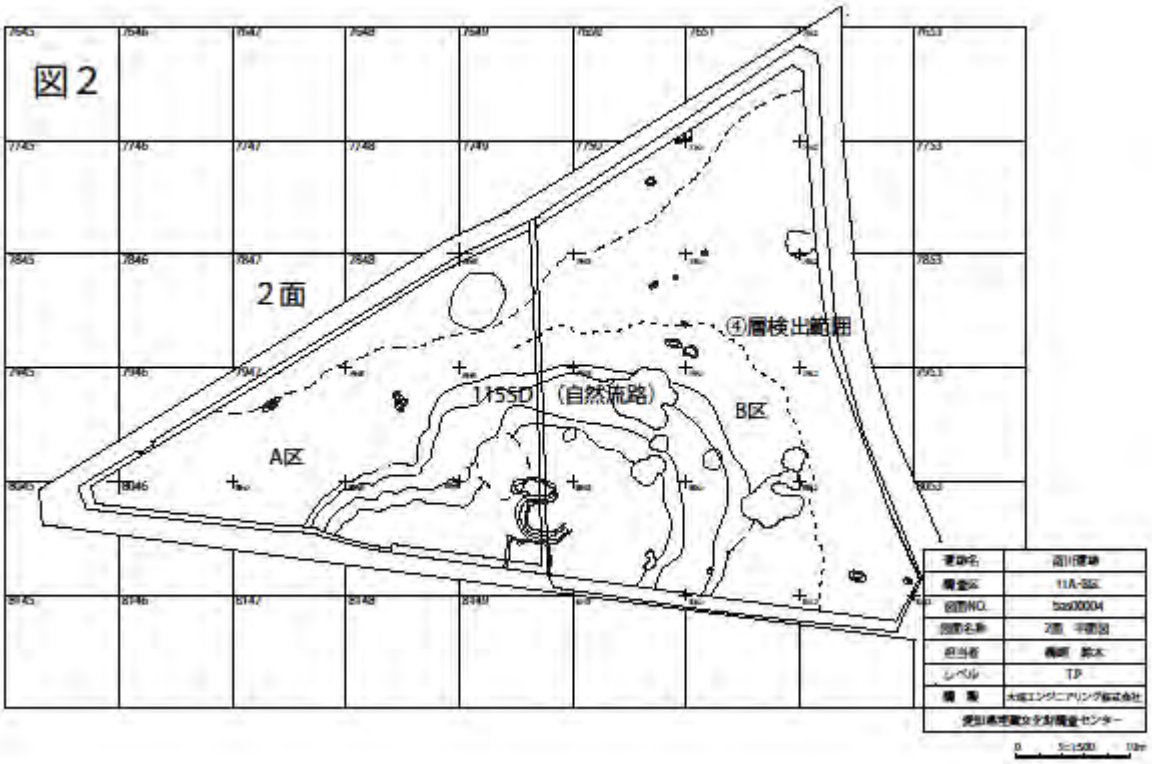


図2
2面
④層検出範囲
115SD（自然流路）
A区
B区
遺跡名
調査区
11A-B区
図面NO.
bas00004
図面名称
2面 平面図
担当者
藤原 鈴木
レベル
TP
縮 尺
S=1:500

南川遺跡　全景(西から)

南川遺跡　全景(北から)

Ｂ区　縄文時代早期・中期～後期の遺物を含む包含層

(中央の黒色土)

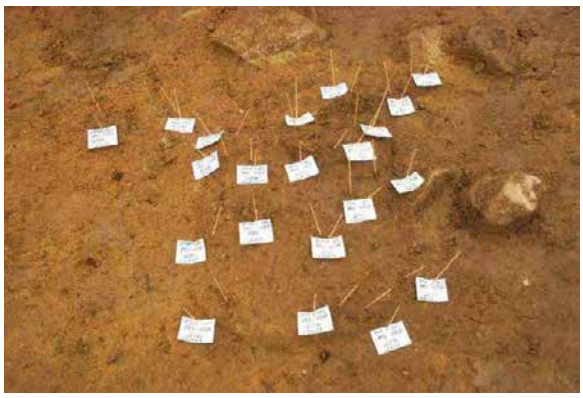
Ｂ区　断面中の黒色土下面～黄色砂（最下層）では縄文時代

早期の土器が出土

Ａ区の柱列　中央の列と交差する列も確認できる

Ａ区完掘状況　基盤層(地山)は巨礫と粗砂の堆積

Ａ区　黒曜石出土状況



Ｂ区　115SD 中の黒曜石チップ出土状況